

AI 活用で挑む学問の革新と創成
2021 年度採択研究代表者

2022 年度
年次報告書

林 和眞

東京都市大学 大学院環境情報学研究科
准教授

AI で拓く都市集合知形成に向けた都市マネジメント

研究成果の概要

当該年度はライフイベントの状況に置かれて研究の進捗が乏しい状況であった。できるだけ当初の目標達成のためにデータ収集と分析を行った。

まず、研究対象地である沼津市の大岡団地とたまプラーザ地域において大規模の QoL 調査を行った。各地域においては地域の特徴を反映し、適宜調査の内容を変更した。沼津市大岡団地は築年数が古い団地であるため、老朽化した団地エリアの中で住民の生活基盤が非常に乏しいことから、QoL の現状と QoL が高い人はどのようなライフスタイルであるかを中心に考察を行った。たまプラーザの場合は、大都市圏郊外住宅地の沿線地域であることから、たまプラーザ駅周辺だけでなく、田園都市線沿線の主要駅周辺地域を対象に社会的な面、郊外ならではの緑環境の側面、QoL の側面などを、幅広い年齢において調査を行った。

これらのデータをもとに機械学習を通じて解析し、指標をモデル化するとともに地理情報の上でデータを融合できるような仕組みを引き続き考えている。一方で、地域のマネジメント主体との話し合いが難しいことも多かったため、研究プロセスがスムーズに行かなかった場合もあった。

沼津市には、古い団地エリアは研究に協力してもらうのが容易ではなかったが、子育て世帯を中心に新しい移住者が増えており、協力を引き続き得られることが確認できた。たまプラーザ地域においては、郊外住宅地の課題と言われている人とのつながりに関する満足度がもともと低い現状を明らかにできたが、郊外住宅地の強みである緑と都市的なサービスがバランスよく混じっている環境については、公的な都市構造だけではなく、プライベートな空間が満足度や QoL にポジティブな影響を与えていることが分かった。今回のデータからは詳しく確認できなかったが、今後、経年的にモニタリングする必要がある、それを踏まえての AI を利用したマネジメントシステムでどのように変化するかを今後検討していく。